

# ポピュラー音楽学会準備会の発足

はしづめだいきさぶろう  
橋爪大三郎

ポピュラー音楽とアカデミズム。こりゃあまた、なんてミスマッチな取り合わせだ。でも大まじめに、そのふたつをドッキングさせようと夢を追っている人びとがいる。そして先頃ついに、学会を旗揚げした。

その名も「日本ポピュラー音楽学会」。実はまだその準備会だけれど、第1回の大会が11月5日、落葉散りゆく上野の森、東京芸術大学で開かれた。参加者は予想をだいぶ上回って、全国から約60人。午前中に「カラオケ論序説」など3本の自由発表、午後はテーマ・セッション「著作権とポピュラー音楽」、そのあとひき続いて総会、懇親会と、充実した内容の一日だった。

たまたまこの会の事務局を仰せつかった私、思い入れもひとかたならぬものがある。

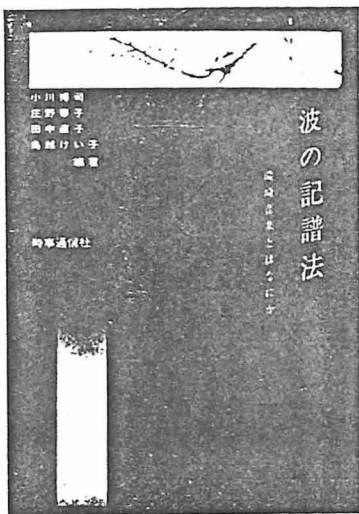
もつと広くこの会の存在が知られ、関心をもつ全国の同志(ただただファンの方でもいいんです)に参加いただければ幸いです。

ポピュラー音楽なんて、肩ひじ張らずに音楽に聞くもの。大人はわかっちゃくれないう、多少甘えた反抗心と、リーゼントになつたポマードの匂い。団塊(戦後ベビーブーム)の世代の私が、中学早々にラジオのヒットパレードを欠かさず聴きはじめて頃、プレスリーはまだ現役で、チャートが上がったり下がったりしていたし、そのあとビートルズなんていう、変わった4人組も出てきたなあ。だからまさか、ポップスが、れつきとした学問になるなんて思ってもみなかった。でも、こんなふうに考えてもいい。

人間のいるところなぜか、必ず音楽がある。そして、民衆(多くの人びと)の愛好する音楽を通して、きつと社会が見えてくる。音がしたり、声が出たりするのは自然現象かもしれないが、それが音楽になり歌になるのは、文化そのもの。人間の社会的な営みの産物だ。これを研究しない手はないだろう。

私の専門は、社会学だが、この分野にはマックス・ウェーバーという大先達がいる。彼は、西欧近代を特徴づける合理化の精神が、音楽の領域にも脈打っていることを実証しようと、大著『音楽社会学』に着手したのだ。しかし未完に終わり、このプランは受け継ぐ者もないまま野ざらしに。ところが最近クラシック音楽もただの「制度」ではないかととらえ、それを成立させた歴史的・社会的文脈を掘り下げようという、若手の学者が大勢出てきてにぎやかになった。活字文化は先細りで、若者は音楽に走っている。昔にくらべれば、人びとの音楽の素養も、情報量も、マーケティングの規模も、桁違いに豊かに大きくなったのである。

——ということに、ちっとも気がついてい



なかつたその昔、正確に言うると一九八三年の春、私あてに一通の案内状が届いた。差し出し人は畏友、小川博司氏。昨年『音楽する社会』(勁草書房)を出版した社会学者である。案内状によると、「日常生活と音楽研究会(日音研)」という会合を、月一回のペースで

始めるらしい。今までの音楽(学)の枠に収まらず、かと言って、社会学の守備範囲からももれていたあたりを、これから研究するのだという。ほかに呼びかけ人は、鳥越けい子、田中直子、庄野泰子のみなさん。なんだかキヤンディーズみたいな三人組。面白そうではないか。ムクムクと好奇心が動いて、出かけて行つた。思えばこれが、今度の学会結成にいたる、いちばん最初のきっかけではなかったかと思う。

この研究会はたいへん盛会で、それに私の知らないことばかりで、実に愉快だった。だからなるべく足を運んだ。マリィ・シェーファアの『世界の調律』(平凡社)を翻訳していた鳥越さんたちが、サウンドスケープの思想を紹介してくれた。そのほかにも、ブライアン・イーノと環境音楽。ジョン・ブラッキーングら音楽人類学の新潮流。ホフスタッターの『ゲーデル・エッシャー・バッハ』。ジャマイカン・レゲエの現在。CFとイメージ・ソングの戦略。戦後日本ポップス史。ジョン・ケージの思想。東南アジアの流行歌事情。などなどといった豊富な話題が、いろんな角度から報告されたのである。やがて大阪に移つ

た小川さんは、関西にも「日音研」を組織し、今日に至っている。

ここから世に問われた成果も多い。小川さん、鳥越さんたちの『波の記譜法』(時事通信社)は、環境音楽についての、日本で最初の書物だ。また、鳥越さんたちのグループは、神田をフィールドにサウンドスケープの調査をしたり、横浜・新鶴屋橋の音響装置を手がけたりしている。

そんな頃、細川周平氏が留学先のイタリアから帰国した。

海外ではひと足さきに、ポピュラー音楽研究者のネットワークが進んでいた。一九八一年には、国際ポピュラー音楽学会(IASPM)が結成される。細川さんは、早くからこの学会に関わり、会員として活躍していた。IASPMは現在会員約六百人。隔年で世界大会を開いて、これまでにアムステルダム、レッキョ・デミリア(伊)、モントリオール、アクラ(ガーナ)と続き、5回目の今年は革命二百年に沸くパリ。細川さんは第2回からずっと参加している。

この学会の、日本支部を作ろうよという話

になったのが、一九八七年のこと。日音研のメンバーなど、関心をもってくれそうな人びとに声をかけ、その秋に設立大会を開いた。IASPMの規定に、会員5人以上が集まれば、その「支部」を作れる、とあったから。この組織がたちまち、50人にふくれあがった。

ところがIASPMの「日本支部」というかたちだと、活動しにくい。だいいち年会費の半分は、本部への「上納金」で消えてしまふ。そのほか何かと、国際規約にしばられる。それくらいなら、日本独自に国内の学会を、いちから作りなおそう、ということになった。

これが冒頭で紹介した、日本ポピュラー音楽学会の準備会である。わが国の草分け・兼・第一人者の三井徹さん（金沢大学）に、代表を引き受けていただいた。三井さんの参加呼びかけを受けて、一九八九年の4月に活動を開始。IASPMの日本支部と協力して、このほどようやく、第1回の大会開催にこぎつけたというわけである。

ところでさつきから、ポピュラー音楽というけれども、どういう意味なのか。英語のニュアンスと、日本語ではだいぶ違

うらしい。日本ではどうしても、ポップスとか洋楽とかいうイメージが強くなる。でも英語では、要するに「民衆の」音楽という意味で、各国各民族の伝統音楽だろうが、演歌・長唄・義太夫のたぐいだろうが、何でも入ってしまう。国際「ポピュラー音楽」学会というのは、そういう意味らしい。要するに、一部の人びとのための「芸術」音楽でなく、ふつうの人々の楽しむ音楽が、ポピュラー音楽なのだ。

日本でもこんなポピュラー音楽に対する関心が、年々深まっている。たとえば、エスニック・テイストに敏感な人びとの増えたことはどうだろうか。こういう変化には、もちろんそれなりの必然がある。

バッハ、モーツァルトを舞台にして、どばつと発展した西洋近代音楽も、今世紀に入るとそろそろ息切れ。可能性をあらかた汲みつくして、クラシックに収まった観がある。

これを突破しなければと、「前衛的」な試みの数々が現れた。この作戦をひとくちで言うくと、正統音楽を「聴く」それまでの態度を聴衆に要求しておいて、そのくせ、正統音楽の



枠をはみ出る「作品」(かなり突飛)を聞かせてしまおう、というものである。当然、その解釈も評価も多義的(まちまち)になり、ごく一部の人びとにしか受容されない。それでもいいんだ、芸術だから、と開き直るのが前衛の前衛たるゆえんである。

こういう試みに、なるほど文化は前進しているわい、と関心する人びとには、ポピュラー音楽なんか、卑俗で低級な音楽にしか聞こえないだろう。大衆にうけているのがその証拠。しかしそれは、正解だろうか。

「前衛」音楽は、楽音/騒音の垣根をとり払った。また、音楽を「聴く」制度がたしかにあるんだなあ、と嫌でもみんなに気付かせた。ところがあべこべに、クラシック音楽が、どんなに特殊な社会的文脈に押しこめられていたものかも、明るみに出てしまふ。

コンサート・ホールの外側には、自然音の世界、音と生活が渾然と溶けあつた日常生活の世界が広がっているじゃないか。大衆をなぐさめ、折々の喜怒哀楽を心に刻んでいく、民衆音楽のうねりもあるじゃないか。異なった音階やリズムや和音の文法に従う、非ヨーロッパ圏の生命にあふれた音楽世界だつてあ

日本ポピュラー音楽学会ニュースレター(第1号)



国際ポピュラー音楽学会機関誌(第13号)



るじゃないか。芸術音楽が一巡し、閉塞しているように見える裏側に、こういう豊かな文化が隠れていたんだ、といまさらのように気付くのも自然のなりゆきだ。さまざまな音響メディアや複製手段により、音の情報化が

進んでいる。古典的な音楽も、音楽理解も、いまや地球規模にひろがる音文化の、ワン・オブ・ゼムにすぎなくなった、とさへ言える。

——ということなのだろう。今もって私は音楽のことがよくわからないが、社会学の立場で考えるなら、クラシック音楽を、人類の音文化全体の中に置き直して、その成立条件を考えるほうが面白い。

音楽学や音楽美学はまだ、ヨーロッパを絶対視する発想から抜け出せないでいるようだ。だから、ウェーバーやフォーコーがやりかけたように、これを系譜学に解消しよう。ポピュラー音楽のなかに、クラシック音楽を位置づけてしまったら愉快じゃないか。

クラシックを相対化するものとして、ロックもある。しかしこれは、微妙なところでクラシックの陰画みたひになつていく。そうじゃなくて、人間の音・音楽の関わりを、そのまるごとのスペクトル(幅)で考えてみるのが、大事。だからこそポピュラー音楽なのだ、と納得している私であります。